

英米文学の教え方 — 俳句を教材にした導入授業 —

島津 信子

1 はじめに：本を読まない学生たち

昨年から人文学部英語英米文化学科の学生を対象に「英米の文学」（春学期：イギリス文学、秋学期：アメリカ文学）を教えている。この科目はカリキュラム上では2年次に置かれており、このあと3年次以降に開講されている「英米文化特講」や「英米文化演習」などへ繋がる英米文化研究の専門基礎科目である。そうした重要な位置づけを担う科目である「英米の文学」であるが、英米文学をどう教えたらよいかというのは私にとっては大きな課題であり、毎学期この問題に突き当たっては、教材の選択から授業の運営方法まで試行錯誤を繰り返している。

英米文学を教えるのが難しいというのには、いくつかの原因がある。まず、なんといっても第一の要因としては若者たちの活字離れがあげられる。現代の若者たちの多くには、本を読み自らの想像力を駆使して文学の世界を探索するというのは苦痛な体験であるらしい。もっと瞬時に、そして受身のままでも楽しめる映像メディアやインターネットを通じた様々な娯楽を、彼らは好んでいるのである。このような背景もあり、実際のところ、多くの学生には読書の習慣がない。それだけでなく、「文学」と聞いただけで逃げ出したくなるような、いわば「文学食わず嫌い」の感覚をもつ学生も少なくない。

文学を教えることを難しくしている別の要因として、本学科が英語英米「文化」学科であり、多少なりとも文学に興味のある学生が集まるであろう「英文科」ではないということもある。近年、日本各地の大学で英語英米「文学」科から英語英米「文化」学科へと改組する傾向が顕著になってきた。文学も広く文化の諸相のひとつとみなす考え方が定着しつつあり、今、時代は確実に「文学」から「文化」へと移り変わっている。文学を文化と捉える考え方そのものについては、私も大いに賛成である。しかし、「文化」といったときに、「文学」はそこに含まれるが、残念ながら、文学という学問自体は学生の興味をひく分野ではないのが現実である。

このような背景に加えて、「英米の文学」を教えるのをさらに困難にしているのは、春学期開講の「英米の文学A」（イギリス文学）においては、これが教職

課程の履修必須科目であるため、英米文学には興味はないが、この科目を履修しなければならない受講生の割合が高いことである。本をまったく読まず、文学には興味がないのに、文学の科目をとらなければならない学生も気の毒というべきなのだろうが、興味のない学生に教える教員としても、毎学期、「英米の文学」の授業は真のチャレンジの場となっている。

本稿は私が「英米の文学」の第1回目の授業の際に行っている英米文学への導入授業の実践を報告するものである。普段から本を読み、書かれていることの意味を考えるという習慣のない学生たち、ましてや「文学」などと聞くと身構えてしまう学生たちに対して、文学とはどのようなものかを考えさせ、すこしでも文学を身近に感じてもらうために、私が採用する教材は日本の現代俳句である。それでは、俳句を使ってどのように学生の興味を文学へと導いていくのかを、以下のセクションでくわしく述べていきたい。

2 俳句：「文学とは何か」を考えさせる教材

「英米の文学」の講義では、第1回目の授業のときに「文学とは何か」という最も基本的な問題について学生に考えさせるようにしている。もちろん、このような大きな質問にたいする答が短時間で出てくるはずはないのであるが、それでもなお、この根源的なテーマを最初に考えさせることには意味があると考えている。自分が取り組む学問がどんなもので、どのように学び、どこへ進んでいくべきかということをおおざっぱでもよいので理解しておくことが、実りある学習には欠かせないからである。そして学期が進むにつれて、授業の折々に、はじめに確認しておいた「文学とは何か」という定義を思い起こさせ、それを具体的な文学テキストの読解に適用させ、より深い作品解釈へ導いていくのである。

「文学とは何か」を理解させるために選んだ教材は、前述のように、現代の俳句である。なぜ俳句なのかと言えば、もともと私自身が俳句を趣味としているので、そこから思いついたのである。きっかけはそういうことなのだが、「文学」と大上段に構えるのではなく、日本人にはなじみの深い俳句を通して文学を考えるのは、授業中の学生の活発な反応から見ても悪くない発

想だと思っている。さらに肝心な点は、この第1回目の授業用教材プリントには、学生たちと同世代の若者が作った俳句を中心に選んで載せてあることである。このため、彼らはより身近な題材を通じて文学の定義を考えることが可能になるのである。

それでは、実際にどのような俳句を採用して教材プリントを作っているのかを報告しよう。1枚のプリントに載せる句は以下の12句である。①から⑩までの句はすべて東方出版の『青春俳句大賞』¹⁾より採用したものである。

- ① リクルートスーツが通る若葉かな
福岡県 土谷啓子 九州栄養福祉大学一年
- ② A sunflower
next to me
higher
滋賀県 長井沙希 野洲市立野洲北中学校三年
- ③ 夏の海方程式を砂で解く
愛媛県 村田梓 八幡浜市立松柏中学校三年
- ④ トマト煮るインターフォンはまだ鳴らず
茨城県 石塚直子 筑波大学一年
- ⑤ ないてるの？笑っているの？レモン切る
茨城県 田畑慎吾 法政大学一年
- ⑥ 授業中せ・し・す・するせみの声
大阪府 中川明紀 大阪府立吹田東高校一年
- ⑦ 毛糸編む思い出くるくる繰りながら
宮城県 樋渡智美 仙台白百合学園高校三年
- ⑧ 「先輩」とはじめて呼ばれた春の朝
北海道 遠島翼 札幌市立石山中学校二年
- ⑨ 作文に父は出てこずきりぎりす
千葉県 森田貫之 開成高校二年
- ⑩ A new school uniform
a little too large
for my daughter
広島県 秋山研龍
- ⑪ 荒海や佐渡によこたふ天河
松尾芭蕉（岩波文庫『おくのほそ道』²⁾）

- ⑫ Trip abroad complete,
I bask in cherry blossoms.
(bask: enjoy sitting in the light,
especially in the sun)
〔「外つ国の旅果て花の盛りかな」〕
福岡県 島津菜月子

それぞれの句の作者の学校名や学年は、前述の『青春俳句大賞』における記述に拠っている。

3 「文学」への様々なアプローチ

授業ではこの俳句のプリントを配布してから、5分ほど学生に時間を与えて、自分の一番好きな句を1句選ばせる。その後、クラスを4, 5人単位のいくつかの小グループに分けて、学生同士でそれぞれが選んだ句となぜその句を選んだのか、その理由を話しあうように指示する。この目的は、自分の俳句の読み方を他の学生に伝えることにより、まず自分の選択した句に対する解釈をさらに明確にさせるためである。次に、自分と他の学生との俳句の好みは違っており、大げさに言えば、文学の趣味も人により異なっていることを認識させるためでもある。

この小グループでのディスカッションが終わったら、次の活動として、各グループの代表者はクラス全体に対して、自分たちのグループで話しあったことを報告する。その際に、グループの各自がそれぞれ選んだ句を、グループ選句の1句という形に集約させる必要はない。むしろ、学生たちにいろいろと違う句が選ばれ、あとの授業を進めやすくする。各グループの報告を聞きながら、私は適度に質問したり、あいづちをうったりして、彼らの選句にたいする興味を示すが、自分の好みや意見を言うことは極力控えるようにしている。それぞれの学生にはそれぞれの好みがあり、それはそれでよいことだと感じてもらいたいのだ。大げさに言えば、文学のテイストに優劣はないということ、学生たちになんとかわかってもらいたいと思っているのである。このグループ活動はいわば授業のウォーミングアップの部分であり、学生に活動への参加を促しながら授業に関心を持たせる狙いがある。

さて、この活動の後にいよいよ教材の俳句についての質問をクラス全体へしながら、「文学とは何か」という定義にむけての授業を展開していく。彼らに最初に聞くのは、①から③までの句を読んでどのような色が見えてくるかという質問である。見えてくるのは、①の句の場合には「リクルートスーツ」から紺色、「若葉」から緑色、②の句の場合には“sunflower”の花から黄色、葉から緑色、空の青色、太陽の白色、③の句の場合には「海」の青色、「砂浜」の白色、空

の青色、太陽の黄色、ヨットの白色、などと彼らは口々に答える。次に、④と⑤の句について、どんな句いが感じられるか、また、どんな味が想像できるかを聞く。④の句について、「トマト煮る」というのはスパゲティのソースを作っているからで、すこし酸味がかった句いが台所から居間にまで漂ってくるのが想像できる、と答える学生がいる。また、別の学生は⑤の句について、「レモン切る」という言葉を読んでいるだけで口の中が酸っぱくなり、唾が出てくると言う。

このような答を引き出しておいて、私は文学の定義の第一番目を黒板に書く。すなわち、文学は視覚、嗅覚、味覚、その他諸々の感覚に訴える芸術であって、読者はテキストから想像し、間接的に体験する感覚を楽しむものだということである。この感覚のなかにはもちろん聴覚も含まれる。そこで⑧の句の「先輩」と呼びかける後輩の声や、⑨の句にでてくる「きりぎりす」の鳴き声が聞えてくるかどうかを問うてみる。また、⑥と⑦の句を取り上げ、どちらも上記の句と同様に読者の感覚に訴える句であるが、その訴え方に文学的な技巧が使われていて一層の効果をあげていることを解説する。例えば、⑥では読者には蟬の声が聞えてくるだろうが、サ行変格活用と蟬の声を重ねあわせて句を詠んだ作者の発想の面白さに注目させる。さらに、⑦の句においては「糸糸」、「くるくる」、「繰りながら」とカ行の頭韻が踏まれていることを指摘し、韻律がもたらす心地よい感覚についても気づかせる。

教材プリントの俳句は、それぞれの句についての学生たちの読み方を聞いていくが、特に④と⑤の句については、複数の学生に解釈を問う。例えば、④の句ではインターフォンが鳴って誰かが来るのを待っているわけだが、誰を待っているのかという質問を試みる。すると、例えば、家でお母さんが家族の帰りを待っているところだと答える学生がいる。別の学生は、女性が恋人のために料理をして、彼の到着を待っているところだと言う。さらに、一人暮らしの男性が料理をしながら宅急便の届くのを待っている、と解釈する学生もいる。⑤の句についても、誰が何のためにレモンを切っているのか、また、誰が泣いているのか、笑っているのか、と質問する。この句に対しては、④の句に対するよりもさらに様々な解釈がでてくる。例えば、レモンを切っているのは作者自身で、スポーツの後の疲労回復のためにレモンを食べようと一人台所に立っているのだが、レモンの汁が何かの拍子に目にはいって、それがしみて泣き笑いしているのだ、という学生がいる。それを聞いて、切っていて目にしみるのは玉ネギだろうから、この句は女性が恋人にレモンティーを入れてあげるときに、向かいあって座っている彼に話しかけているところだ、と説明する学生もいる。さ

らに、レモンを切っているのは男性で、恋人と喧嘩した後の仲直りのきっかけとして彼女に紅茶をいれようとしているのだが、背後にいて顔のみえない恋人が気になって、レモンを切りながら彼女に対する問いを発している句だ、とくわしく解釈する学生もでてくる。このように、学生によって解釈は異なり、様々な俳句の読み方が出てくるが、それをクラスに示すことこそが質問の狙いだ。つまり、「文学とは何か」という問いにもどって考えると、文学にはいろいろな解釈があってよく、ただ一つの正解などないのだ、と学生に認識させることが大切なのである。

文学の複眼性ともいうべき点に注目させるために、次に私は⑨と⑩の句に対する解釈を学生に尋ねる。⑩は英語の俳句であるが、学生たちにとってこの句の理解はたやすいようである。これは父親が娘のことを詠んだ句だというのは当然わかるが、娘は何歳くらいなのだろう、と私は聞いてみる。すると、学校へ入学する前に新調した制服が大きすぎると言っている句だと思うから、この句の娘は成長期にいるはずで、たぶん中学に入る前だと思う、とある学生が答える。小学生と中学生の違いは大きく、中学へ入ったときは自分も一気に大人の仲間入りをしたような気がした、と彼は語る。それでは、この句の父親の気持ちというのはどんなものだろうか、と私は質問を続ける。それに対しては、今までは考えたこともなかったけれど、自分の父親もきっとこんな愛情をもって自分の成長を見守ってくれたのだと思う、とある女子学生が答える。

次に、「父親」という言葉がでてくる⑨の句について、学生の解釈をきいてみる。作者である子が父親のことを詠んでいるわけだが、作文に父親のことは書かないと言っているけれど、では母親のことは書くのだろうか、そして「きりぎりす」という季語はどんな情緒を引き起こす言葉だろうか、と質問をしぼって学生に尋ねる。即座に、母親は身近な存在だから作文にも書くだらう、と一人の学生が答える。では、なぜ父親のことは書かないのかというと、父親は「ウザイから」と彼は続ける。最近では洗濯物も家族とは別にされている父親もいるらしい、と別の学生がいう。そこまできたところで、「きりぎりす」は秋の季語であることを伝える。すると、この季語は「寂しい」感じをおこさせる言葉だと学生たちはいう。そこで、⑩の句に描かれる娘の成長を喜ぶ父親像と、⑨の句で詠まれる煙たがられて、寂しい思いをしている父親像を比較させて、例えば、親として、また子としてというように、作者の立場が違うと、まったく違う感慨、世界観の作品が生み出されることを指摘する。そしてこの点も、「文学とは何か」と考える際に常に考慮すべきことなのだ、と学生に伝えるのである。

4 文化としての「文学」

これまで、①から⑩までの俳句を取り上げながら、文学を学ぶ際に考慮しておくべき態度や事柄を理解させる方法について述べてきた。ここまでのところは、しかしながら、「文学とは何か」という問いに対する答を導くための前段にしすぎない。前述した事柄を考慮させつつ、「文学とは何か」という定義の核心を考えさせるには、さらなる問いかけを学生にする必要がある。そこで次のセクションでは、どのようにして学生を「文学」の定義の核心へ導くかを述べる。

さて、「文学とは何か」という問いに対して、私が導きだしたい究極的な答とは、「文化としての文学」というものである。この概念を教えるためには、⑪と⑫の句を題材にした質疑応答が不可欠になる。

⑪は芭蕉の有名な句であるが、前述の例にならって、最初に以下のような質問を学生にする。つまり、「この句を読んで、どんな情景が想像できるか、どんな色が見えるか、どんな音が聞こえるか、どんな匂いがするか」などの問いである。何人かの学生に質問をしていき、クラスのほとんどの学生が海岸、島、夜の荒海、天の川の煌めきなどの情景を思い浮かべたところで、私は黒板に大きな絵を描く。陸と海と島と星を描いた絵である。そして作者はこちら側の陸にいるのか、それとも向こう側の島にいるのか、と何人かの学生にきいてみる。作者は陸のほうにいて、島を眺めながらこの句を作ったのだ、という正解をいう学生は三分の二くらいだ。そこで、芭蕉は新潟側から佐渡島を眺めてこの句を詠んだことを説明し、次に佐渡島の歴史的な背景について学生たちに質問する。佐渡に徳川幕府直轄の金山があり、その黄金の採掘のため過酷な労働を強いられたのが島流しにされた罪人たちであった、と知る学生は少ない。そこで流人にまつわる史実を話し、彼らが孤島に幽閉されているからこそ、銀河を眺めながら、どんなにか外の世界を、故郷を、愛するものたちを思ったか、ということ想像させる。また、陸と島とを隔てる海とは異なり、空はどこまでもつながっていて、あちら側の島に置かれた流人たちも、また、こちら側にいる作者も、天の川に等しく照らされているのだという事実を指摘する。そしてそのような感慨にふけりつつ、芭蕉はこの句を詠んだであろうという解釈を示し、この句に対する理解をさらに深めさせる。

もちろん、佐渡島の歴史を知らなくても、雄大な写生句としてこの句を味わうことは可能である。また、国文学者の間でもこの句の解釈をめぐる様々なものがあり、ただ一つの正しい解釈として上記の読み方を教える意図はないが、流人の悲話を知っていると、この句の解釈がまた違った深まりを帯びるのは確かである。このように、文学はテキストだけが独立して存

在するものではなく、テキストの解釈をめぐるのは、歴史的、社会的、文化的、そして政治的な背景が無視できないのだということを、この句の鑑賞を通して学生たちに理解させるのである。

ここまで、「文学とは何か」という問いに対する「文化としての文学」という答を導きだすための指導方法について述べてきたが、次に「文学」のなかでも「英米文学」というとき、この文学がどのような特徴をもっていて、どのように教えるべきかという問題を考えなくてはならない。この問題に対処する第一歩として、私は⑫の句を取り上げて、各国の文学の特色という点について説明をはじめ。この句に対しても、前述したような方法で学生たちの解釈をきくが、彼らには句の大意は問題なく理解できる。次に解説として、英語のほうの句では“cherry blossoms”と訳してあるので、この句が桜を詠んだものだとすぐにわかるが、日本語の原句では「花」としかいっていないことを指摘する。そして日本語の短歌や俳句では、「花」といえば常に桜を指すのだという説明をして、日本人が桜を愛し、毎年、桜の季節になると落ち着かなくなることを、学生自身の経験からも思い起こさせる。

実は、⑫の句の作者は筆者自身であるのだが、日本人が桜に対して抱く特別な思い入れについて、私は個人的な体験を話しながら、さらに説明する。この句を詠んだ当時、私はアメリカの大学へ長期休暇ごとに通って博士号の取得をめざしていた。さて、桜の開花時期は毎年微妙に違うものだが、この当時の何年間か、春休みをアメリカで過ごして帰国すると、桜の盛りの時期はもう終わっていて、見頃の桜は見られなかったのである。ところが、この句を詠んだ春には、何年ぶりかで盛りの桜に間に合ったのだ。しかも、その折は博士論文の口頭試問に合格して帰国したときだったので、自身の達成感や解放感もあり、満開の桜の美しさにひととき感動したのだった。桜にこのように執着するのは世界中を探しても日本人に特有の心情であり、桜の花と自分の人生を重ね合わせる感慨なども、日本の古典文学にはよく見られるものである。この「日本人と桜」を一つの例として、世界の各国の文学にはその国の人びとが独自にもつ関心やテーマが描かれているのだということを、私は説明する。

それでは、「英米の文学」に特有の関心やテーマとはどのようなものかという疑問が、当然、次にでてくる。これについては、俳句を教材に使っての「文学とは何か」の講義の後、2回目以降の授業で考えていくことになる。ここでは、第2回目の授業で「英米文学」への導入をさらに行う際の、授業の概略だけを述べておこう。まず、教材として使用するのはアメリカの女性作家Alice Walkerの短編小説“The Flowers”³⁾で

ある。これは非常に短い物語で、A4の用紙一枚に収まる長さであることから、1回分の授業の教材として適している。この短編小説を使って、plot, character, structure, mood, symbolism, point of view, themeなどの諸観点から作品を分析していく新批評の方法を教える。この批評手法を教えるのは、文学理論が日々進化し、様々な様相をもって私たちの前に現れる今日においても、新批評が文学初心者にとっての基礎的な読解方法として非常に有効だからである。

この短編小説を教材に選ぶ意味として大切なのは、これがアメリカ南部を舞台にした作品であり、このなかに白人による黒人に対するリンチ殺人を暗示する一節が含まれているからである。主人公の純真無垢な黒人の少女がある晴れた日にひとりで遠出をして、林のなかで遭遇する遺骨とそれをとりまく状況から、過去のリンチ殺人を推量し、かつ黒人としてのアイデンティティにめざめる、という物語を理解するには、アメリカ南部で黒人がどのような社会的状況の下に置かれてきたのかを知らなくてはならない。それを知り、理解しようと努めることこそ、「文化としての文学」を学ぶことなのである。そしてこのとき学生たちは、アメリカという国に特有なテーマである人種差別を取り扱った「アメリカ文学」を学ぶことになるのである。

5 まとめ

本稿は人文学部英語英米文化学科の開講科目「英米の文学」における導入授業の実践報告である。毎学期、読書習慣のない学生たちに、いかにして文学を教えるかというのは、私にとって大いなる挑戦である。ここまで試行錯誤を繰り返しながら教えてきたのであるが、この科目の授業にあたっては、まず「文学とは何か」という定義から入っていくことが必須であると考え、学生が彼らにはなじみのうすい文学という学問を始め

るのに際して、教師が最初に目指すべきゴールを示してあげることが重要だと思ふのである。この目的のために教材として私が選んだのは、おもに学生と同世代の若者が作った現代の俳句である。学生たちにとって身近な話題や感覚が詠まれている俳句の鑑賞を通して、文学を味わうために知っておくべき態度や事柄を伝えていくのだが、これまでのところ学生たちの反応は良く、教材としての俳句の使用は成功しているといえる。そして前述の芭蕉の句や拙句の解釈を通して、究極的には、「文化としての文学」という概念を学生に植えつけることが、私の狙いである。さらに、世界の各国の文学にはその国の人びとが固有に抱く関心やテーマが描かれていることを、彼らに認識させることも忘れてはならない。彼らにその認識ができてはじめて、次の教材であるAlice Walkerの短編小説“The Flowers”の学習へ導いてゆく。この短編小説を教材にして、私は英米文学の基礎的な読解方法である新批評による作品分析のしかたを教えている。学生にこの手法を習得させた後、「英米の文学」の授業では所定の長編小説の読解を一学期間かけて行っているのである。

以上、私が実践している「英米の文学」の教授法の一部を紹介したが、前述のように、試行錯誤の繰り返しでこの科目を教えているのが実情であり、読者の方々のご教示を賜わることができれば幸いである。

参考文献

- 1) 龍谷大学編 (2007) 『青春俳句大賞: 龍谷大学第4回青春俳句大賞』 大阪: 東方出版
- 2) 松尾芭蕉 (1979) 『芭蕉 おくのほそ道』 (萩原恭男 (校注)) 東京: 岩波書店
- 3) Walker, Alice. “The Flowers.” *Reading and Writing about Short Fiction*. Ed. Edward Proffitt. New York: Harcourt, 1988. 404-05.

(教授 人文学部 英語英米文化学科)